

第7章 古墳時代前期の顔戸遺跡群—本遺跡出土遺物の検討を中心として—

国立歴史民俗博物館

助教 山下 優介

はじめに

米原市の南西部にあたる旧近江町域に位置する顔戸遺跡群は、今回調査を実施した長門寺遺跡・顔戸遺跡・高溝遺跡を含み、過去の複数次にわたる発掘調査でも数多くの遺構や遺物が確認されている。それらのなかでも、本節では古墳時代前期の資料に注目し、今回出土した土師器の年代的位置づけに関する議論を基礎として、顔戸遺跡群の変遷を論じてみたい。変遷を論じるにあたって、古墳時代前期とその前段階の弥生時代後期をおもな対象とする。

1. 顔戸遺跡出土土師器

本報告資料のうち、古墳時代前期に属する土師器について、その年代的位置づけを検討する。第3章で報告した長門寺遺跡第3次調査では、当該期の土器は小片のみであり図化できるものはなかったため、顔戸遺跡第3次調査ならびに高溝遺跡第4次調査出土資料に関して論じることとする。

顔戸遺跡では、S I 1やS I 1に関連したピット、あるいはS D 1から器種や器形などの特徴が明らかな土師器が出土した。S D 1から出土した土師器には古墳時代前期の受口甕が含まれるが、他の高杯をみるかぎり古墳時代中期の土師器を多く含む資料である。したがって、本節ではS I 1に関連する遺物について述べる。

S I 1とS I 1内のP 9からは、受口状口縁甕（以下、受口甕）の口縁部片が3点と、底径が約10 cmの平底の底部が出土している。底部は壺の可能性が高い。図27-1～3は施文をもたない受口甕である。このような無文の受口甕の所属時期を絞り込むことはやや難しいが、筆者編年のⅦ期（山下2020）、布留式古段階新相（西村2008）に並行する時期に位置づけておきたい。口縁部の屈曲具合や口縁端部を外方へつまみ出す特徴が類似した1・2と、3は形状が異なるが、受口甕が無文化する時期は複数系統の甕の影響を受けて多様な受口甕がつくられる時期であり、口縁部の形状を根拠に詳細な時期を定めることが困難である。地理的に北陸地方や東海地方の土器の影響が色濃く反映される米原市域では、その傾向が一層強く、受口甕による時期の細別を難しくしている。

2. 高溝遺跡出土土師器

第5章で報告された高溝遺跡出土土師器は、試掘調査で出土したものも含め、いずれも沼跡から出土したものである。したがってこれらの土師器の年代的位置づけはあくまで沼が存在した時期の一点を示すに過ぎない。しかし、それらのなかに、遺跡の変遷を考えるうえで重要な時期的な上限や下限、あるいは中心時期を示すであろう資料が含まれているため、それらについて簡単に述べたい。

報告された土器のうち、弥生時代後期から古墳時代前期という時間幅のなかで最も古い時期に位置付けられるのは口縁部の側面に施文をもつ受口甕や受口鉢である。図28-1～3は櫛歯状工具や木口状工具によるとみられる刺突列点文やキザミが施されている。

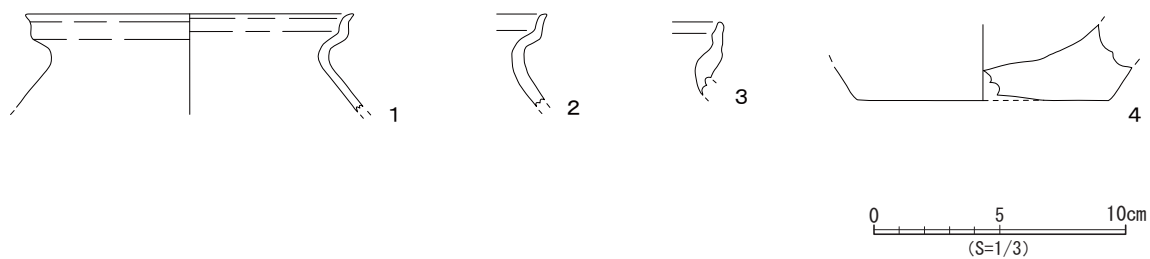


图 27 顔戸遺跡（I 区）出土遺物

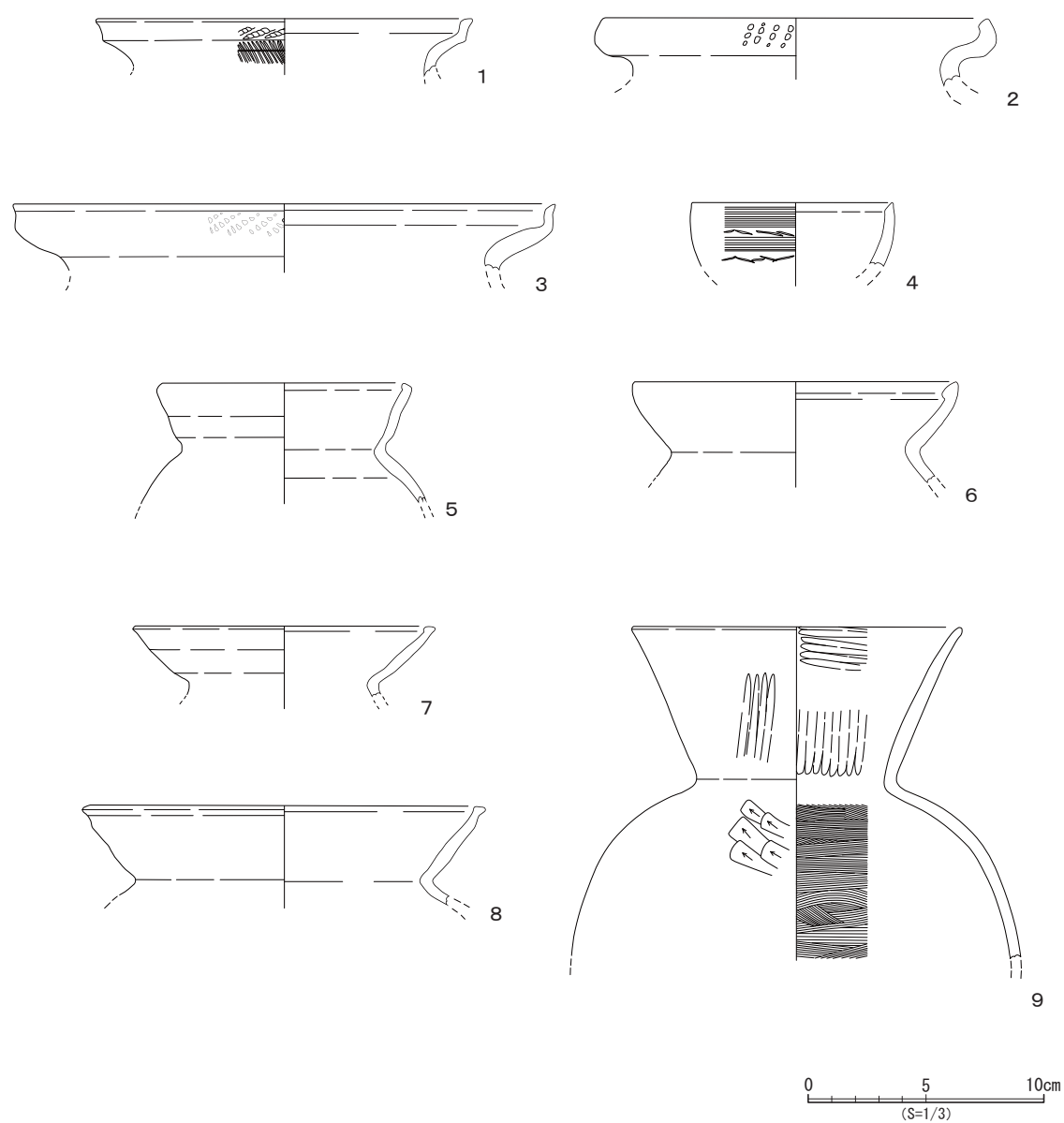


图 28 高溝遺跡 出土土師器

いずれも口縁部の小片であるため所属時期を限定することはできないが、口縁部が無文の受口甕が主体的になる筆者編年のⅥ期より古い時期であり、庄内式並行期以前といえるだろう。

図 28-4 は、外面に多条沈線文や山形文が施される小形の椀形高杯である。濃尾平野やその周辺地域で採用され、近江地域にも類例が存在する。4 の山形文は板状などの工具の端部で施されているとみられ、位置がずれているために部分的に山形を描けていない箇所がある。近江地域での類例が乏しいため、4 を年代的に位置づけることには躊躇するが、筆者編年のⅤ期、庄内式中段階から新段階（西村前掲）を中心とする時期に属すると考えられる。

口縁端部を肥厚させたいわゆる布留形甕（図 28-5～8）を中心とする一群は、別時期の資料に比べて豊富に出土しており、沼跡出土土師器の主体を占めるといえる。布留形甕の口縁端部の形状をみると、肥厚させた端部の上端が内傾するものが多いためやや後出的な要素をもつ個体が多いといえるが、筆者編年のⅧ期、布留式中段階（西村前掲）におおむね並行する時期に属する資料ととらえられる。

図 28-9 の直口壺は、口縁部から頸部の内外面をミガキによって仕上げる精製品であり、この資料を単独でみたならば筆者編年のⅦ期にみられる直口壺の器形や調整の特徴がよく表れた例と評価できる。出土資料に含まれる無文の受口甕は、上記の布留形甕と同じ時期、あるいはⅦ期に属すると理解してよいだろう。

ここで、高溝遺跡の沼跡から出土したモモ核の放射性炭素年代測定の結果にふれつつ、出土土師器の暦年代について考えてみたい。9 点のモモ核を対象に放射性炭素年代測定をおこなった結果、いずれの試料も ^{14}CBP 値が $1765 \pm 20 \sim 1700 \pm 20$ の間に入り、年代的に近接していることが示された。第 6 章図 25 が示すように、確率分布が示す年代にはやや幅があるが、沼跡出土土器の主体を占める土器の時期を加味すれば、これらのモモ核の多くは 4 世紀中頃～後半の暦年代に属すると考えることが妥当だと考えられる。また、試料のうち No. 7 のモモ核はほかの試料よりやや古く、4 世紀前半頃の年代が出ているが、上述のように、主体を占める土器の前段階の資料が少量認められることと整合的な結果ととらえられる。

本報告の年代測定に関連する研究として、代表的なものに奈良県桜井市の遺跡出土資料を対象とした分析（春成他 2011）がある。春成他（2011）では、纏向古墳群や纏向遺跡群などから出土した木材・種実・土器付着炭化物の放射性炭素年代測定を実施し、測定値を日本産樹木の放射性炭素年代に基づいて較正することで、弥生時代後期から古墳時代前期、特に古墳出現期の暦年代を得ようと試みられた。布留式中段階の資料に関しては測定数が少ないものの、上之庄遺跡の「布留 2」式とされる土器の土器付着炭化物と、同時期に属するとされるモモ核の測定が行われ、2 点の土器付着炭化物は ^{14}CBP 値が「 1770 ± 20 」と「 1775 ± 15 」、モモ核は「 1710 ± 15 」であった。本報告の測定値に近い値が得られているといえよう。

放射性炭素年代測定の結果と土器の暦年代の対応関係については、分析の蓄積を俟って議論する余地が十分にあるが、高溝遺跡沼跡出土土師器の所属時期の中心は、既往の年代観からみても大きく矛盾しない 4 世紀中頃～後半にあると理解することが妥当であろう。

3. 顔戸遺跡群の変遷

以上に論じた出土土師器の年代的位置づけをふまえ、ここからは顔戸遺跡群および周辺遺跡の変遷を弥生時代後期から古墳時代前期を中心に論じてみたい。このテーマに関して最新の知見に基づいて論じる必要があるが、顔戸遺跡群とその周辺を対象とした発掘調査は、本報告でも述べているように 1980 年代から 90 年代前半にかけて広い面積が調査され、それ以降は小規模な調査が実施されてきた。したがって、2000 年代以降に重要な新所見が得られていない現状では、90 年代に論じられた遺跡の変遷観（宮崎 1994）をおおむね首肯できると考えられ

る。そのような立場から筆者は、宮崎（1994）を基礎としながら本調査の知見を加えて顔戸遺跡群について論じることとする。

顔戸遺跡群の変遷を論じるうえで初めにふれなければならないのは、高溝遺跡の北側に隣接して展開する、法勝寺遺跡群の弥生時代の遺構や遺物である。遺跡群は、法勝寺遺跡・狐塚遺跡・碓遺跡・奥松戸遺跡からなる。狐塚遺跡は、帆立貝形古墳である狐塚5号墳や円墳群が著名な遺跡であるが、法勝寺遺跡群の広い範囲にわたって弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓が100基前後確認されている。

法勝寺遺跡をみると、弥生時代中期中葉から方形周溝墓の造営が開始され、中期後葉にかけて造営が活発化する。その後、後期初頭に方形周溝墓の空白期を経て、後期後葉以降に造営が再開され、筆者編年のⅤ期に相当する時期まで続くという変遷観が示されている（宮崎 1990b・1994）。このような変遷の背景として、後期初頭に発生した自然災害による遺構の埋没を推定している点（宮崎前掲）は非常に興味深い⁽¹⁾。弥生時代後期後葉以降の方形周溝墓は、法勝寺遺跡第4次調査区にあたる法勝寺遺跡の南側や、顔戸遺跡群の南側に位置する長門寺遺跡の第1次調査区を中心に確認されている。

法勝寺遺跡で方形周溝墓群が衰退する頃には、法勝寺遺跡群の西側に広がる碓遺跡でも溝跡などの遺構が認められているが、この頃から顔戸遺跡群が大きく発展していく。顔戸遺跡三反田地区で検出された大溝 SD01 から、弥生時代後期後葉～古墳時代前期の土師器が数多く出土しており、法勝寺遺跡群で目立たなかった古墳時代前期の資料が豊富である点が注目できる。この傾向は高溝遺跡でも同様である。

高溝遺跡大井地区で検出された「大溝」は、その位置関係や規模から上記の SD01 に関連した遺構であると考えられるが、報告書掲載遺物をみるかぎりでは壺や高杯などに装飾が残る例が多く、SD01 より年代的に古相の土器が多く含まれる。このことは顔戸遺跡群内の集落変遷を考えるうえで重要な知見であるが、依然として遺物を伴う堅穴建物などの資料不足は否めず議論を深めることは難しい。銅鏃や小形仿製鏡といった青銅製品が高溝遺跡大溝から出土していることも、遺跡群内の変遷を理解するうえで示唆的である。

顔戸遺跡では、SD01 より東側に位置する地点の調査で堅穴建物跡が検出されているが、当時の報告では所属時期について明言されていなかった（近江町教育委員会 1991）。本報告第4章に述べたとおり既往の調査地点と本報告の地点は隣接しており、堅穴建物跡の主軸方向が同じであることもふまえれば、既往調査と本調査の堅穴建物跡は同時期に属すると考えられる。堅穴建物と大溝の位置関係などから、大溝に対して、微高地上の集落をとり囲む古墳時代の「環濠」としての可能性が指摘されているが（宮崎 1990a など）、その後の調査で集落域の全体像がみえていない現状では、集落と大溝との関係性について積極的に論じることは控えたい。

また、顔戸遺跡群における集落の展開を論じるにあたって注目すべき遺跡に、顔戸遺跡から南西方向に約 0.5 km 離れ、現在の天野川の右岸に位置する黒田遺跡がある。黒田遺跡では、多量の土器・焼土塊・木製品・モモ核が出土した SX01 や独立棟持柱建物 SB02 が検出され、モモ核や木製品の出土状況などから SX01 は祭祀的な利用が推定されている。SB02 のような独立棟持柱建物も特別な用途を推定されることが多い遺構である。SB02 の隣には、布掘り掘り方をもつ掘立柱建物 SB03 が主軸を同じくして検出されている。これらの遺構は出土土器から顔戸遺跡の堅穴建物と同様なⅦ期に属すると考えられる。顔戸遺跡群は、本調査の出土遺物が示すように、古墳時代前期後半頃から一時的に衰退し、その後は中期後半頃に再び展開するようである。古墳時代前期における最盛期の様子が黒田遺跡の棟持柱建物や祭祀土坑に表れていると理解できるだろう。

ここまで、法勝寺遺跡群の状況にもふれながら顔戸遺跡群の変遷を概略的に論じてきた。最後に、近年の近江地域を対象とした集落研究の視点から両遺跡群の変遷をみてみたい。近江地域の集落研究について研究史を詳細に繙くことは本節の目的ではないため、ここでは近年の成果にしぼって論じることとする。

2000年代までの発掘調査成果を集約することで、近畿地方を中心とした各地の集落変化の内容が明らかにされ、近江地域でも湖東・湖南地域の集落動態が検討された（戸塚 2016・古代学研究会編 2016）。そこでは、弥生時代中期後半と後期前半の間の画期と、後期前半と後半の間の画期が集落動態上の大きな画期のうちのひとつとしてとらえられ、前者が「拠点集落」の縮小や新興集落の出現を、後者が集落の再編成を伴うと評価されている。その後、近江地域の北半部もふまえた検討でもその傾向は追認され、建物数や周溝墓数が急増するのは具体的には弥生時代後期後葉であることが示された（荒木他 2022）。

実証的なデータを提示した検討が不十分ではあるものの、法勝寺遺跡群にみられた後期初頭の空白期と、高溝遺跡の大溝の形成時期はこれらの画期に整合する可能性が高い。特に、弥生時代後期初頭の衰退の問題は近年再び活発な議論を呼んでいるため、その状況を明確に観察できる米原市域の遺跡群の変遷を再検討する意義は大きいだろう。

おわりに

おわりに今回の調査で確認された遺構や遺物は決して多くないが、顔戸遺跡の堅穴建物跡の検出例を増やし、それらの所属時期を古墳時代前期前半と推定しうる土器が出土している点において重要な成果が得られたといえる。この成果によって、これまでは大溝のみから推測するほかなかった顔戸遺跡群の集落域の様相が、着実に明らかになった。

顔戸遺跡群の実態解明に向けては今後も新知見の獲得が不可欠であるが、周辺地域の集落変化の傾向と比較検討することで、法勝寺遺跡群から顔戸遺跡群の変遷過程を類推的に論じられる可能性がある。本節で若干ふれたような近年の集落動態研究の成果をふまえた再検討が必要になるだろう。ただし、そのような集落動態の再検討に取り組むためには、本節のように時期を限った検討では不十分であり、少なくとも弥生時代から古墳時代全体にかけて変遷を把握する必要がある。長門寺遺跡で古墳時代中期の遺物が集中して出土したが、それらをふまえて顔戸遺跡群を評価できなかったことは本節の課題である。

註

- （1）宮崎は法勝寺遺跡第3次調査区内の方形周溝墓を、その構造や規模、配列に基づいてAからDの4つのグループに分け、その変遷を論じている。この分類の根拠には、上に挙げた要素以外にも構築時期や位置、重複関係などが複合的に考慮されていたことが窺えるが、自然災害による遺構の埋没が確認されたA・Bグループの方形周溝墓が埋没後、視認できなくなった箇所にC・Dグループが形成されるという変遷観が示されている（宮崎 1990b）。先行する墓に対して異なる主軸をもつ墓が重複して構築される法勝寺遺跡の状況や、弥生時代中期後葉の遺構の埋没後に重複して後期の遺構が形成される類例が滋賀県内に複数存在するといった事実に基づいた推論の蓋然性について、筆者は十分に肯定できると考えている。しかし、法勝寺遺跡の方形周溝墓の埋没状況については詳細な情報が記載されているとはいえず、「自然災害」による遺構の埋没という見解については検証が難しい。そのため、法勝寺遺跡における方形周溝墓造営の画期が生じた原因については、今後の新知見を俟って妥当性を判断したい。

参考文献

- 荒木 幸治・伊藤 淳史・桐井 理揮・清水 邦彦・瀬谷 今日子・戸塚 洋輔・中居 和志・田中 元浩・三好 玄・森岡 秀人・山本 亮・渡邊 誠 2022「弥生後期社会の実像―集落構造と地域社会―」『古代学研究』233、古代学研究会 pp. 3-28

近江町教育委員会 1990『高溝遺跡』近江町文化財調査報告書 4

近江町教育委員会 1991『埋塚遺跡』近江町文化財調査報告書 8

近江町教育委員会 1994『黒田遺跡 3』近江町文化財調査報告書 17

古代学研究会編 2016『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房

戸塚 洋輔 2016「近江地域」古代学研究会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房、pp. 101-130

西村 歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』資料集』香芝市教育委員会、pp. 1-42

春成 秀爾・小林 謙一・坂本 稔・今村 峯雄・尾寄 大真・藤尾 慎一郎・西本 豊弘 2011「古墳出現期の炭素 14 年代測定」『国立歴史民俗博物館研究報告』163、pp. 133-176

宮崎 幹也 1990a「第 6 章 まとめ」『顔戸遺跡』近江町文化財調査報告書 5、近江町教育委員会、pp. 30-31

宮崎 幹也 1990b「第 6 章 まとめ」『法勝寺遺跡』近江町文化財調査報告書 6、近江町教育委員会、pp. 63-68

宮崎 幹也 1994「黒田遺跡を取り巻く土器編年」『黒田遺跡 3』近江町文化財調査報告書 17、近江町教育委員会、pp. 58-86

森岡 秀人・西村 歩編 2006『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

山下 優介 2020「近江地域北部の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年―器台形土器を中心とした検討―」『東京大学考古学研究室研究紀要』33、pp.121-153